

養殖衛生管理体制整備事業（海面）

古川豊和（増養殖部）

1 目的

養殖魚介類の防疫指導を適切に行うことで、疾病のまん延防止を図り、安心・安全な生産・供給体制を確立する。

2 方法

1) 養殖場の巡回指導

県内を北部（由良湾）、中部（田辺湾）、南部（串本浅海漁場・大島養殖漁場）および東部（浦神湾・森浦湾・勝浦湾）の4海域に分け、毎月1回ずつ防疫パトロールを実施した。

2) 魚病検査

巡回指導の際のサンプリングや試験場に持ち込みのあった検体に対して魚病診断・健康診断を実施し、原因確認とそれに対する対策指導を行った。診断は、外部症状や解剖による内臓の病変を観察した後、常法に従って寄生虫、細菌の検査を行った。細菌は抗血清による簡易同定を行った。また、イリドウイルス病はギムザ染色、キセノハリオチス症およびヒラメのクドア（クドア セプトンククタータ）症はPCR法、ウイルス性神経壊死症（VNN）はRT-PCR法により検査を行った。

3) 水産用医薬品残留検査

マダイ養殖における水産用医薬品適正使用指導に資するため、平成23年11月16日・18日に養殖マダイを田辺湾（1歳魚、平均魚体重1.0kg）および串本町大島漁場（2歳魚、魚体重2.0kg）から5尾ずつサンプリングし、筋肉中の塩酸オキシテトラサイクリンの残留検査を行った。

3 結果及び考察

1) 養殖場の巡回指導

養殖業者に対して魚病発生状況および水産用医薬品の使用について状況調査、指導を行った。

2) 魚病検査

(1) 持ち込み病魚の検査

検査件数は13魚種52件であった。魚種別ではマダイが18件で最も多く、次いでクロマグロ16件で、この2魚種で全体の約65.4%を占めていた。月別に見ると4月と8、9月の高水温期に多く見られた。

(2) 魚種別魚病発生状況

ブリでは白点病が10月に1件発生し、カンパチでは血管内吸虫症が単独またはベネデニア症との合併症で4月と12月に1件ずつ発生した。

マダイではイリドウイルス病が単独もしくはエドワジェラ症やエピテリオシスチス症との合併症で9、10、11月に合計4件発生した。細菌病は単独およびウイルス病や寄生虫病との合併症で11件見られ、そのうち、エドワジェラ症2件、腹部膨満症1件、滑走細菌症1件、レンサ球菌症1件、エピテリオシスチス症6件であった。寄生虫病は発生件数6件で、ピバギナ、ラメロディスカス、ベネデニアの寄生が見られた。

ヒラメでは細菌病の滑走細菌症が4月に発生し、シマアジでは細菌病のピブリオ病が5月に発生した。

イシダイでは寄生虫病のベネデニア症が2月に発生し、クエでは8～12月にかけてウイルス性神経壊死症が4件見られた。

クロマグロではイリドウイルス病が8月と9月に2件ずつ発生した。寄生虫病はカリグス症が4月に発生し、血管内吸虫症が単独または脳粘液胞子虫症および心臓クドア症との合併症で9、10、11、3月に合計8件見られた。また、脳粘液胞子虫症と心臓クドア症の合併症が3月に発生した。その他、骨折による死亡が8月と2月に1件ずつ見られた。

(3) 健康診断

診断件数は13魚種91件であった。このうち、水産用ワクチン接種前の健康診断は4魚種4件であった。魚種別に見ると、マダイが中間魚と稚魚を合わせて57件と全体の約62.6%を占め、次いでトラフグが9件、カンパチが5件と続いている。

マダイでは稚魚でエピテリオシスチス、ピバギナ、ラメロディスカス、トリコジナおよび白点虫の寄生が確認された。

トラフグでは、中間魚でヘテロボツリウム、シュードカリグス、トリコジナおよびネオベネデニアの寄生が確認され、カンパチの中間魚では、血管内吸虫とベネデニアの寄生が確認された。

2) 水産用医薬品残留検査

いずれの検体からも塩酸オキシテトラサイクリンは検出されなかった。